

世
中
人
之
事



居候にて候



居候にて候

昭和五十五年十月二十五日初版発行

定価二、五〇〇円

著者 辻 まこと

編者 三浦健二郎

発行者 志村俊司

発行所 株式会社 白日社

東京都新宿区西新宿一―三―三 榎本ビル
電話 (〇三) 三四二―〇〇五四
振替 東京四―二四三八八

印刷・精興社 製本・三水舎

居候にて候
目次

I	マンガンの海に泳ぐ鮫	6
	諸君！足を尊敬し給え	7
	自然の彫刻作品	31
	雪の根名草越え——スキー・ツアー	33
II	我流スキーの幸福	42
	スキー学校でお世話になりました	46
	駄足スキーヤーの駄足のスキー史	54
	スキー雑談	69
III	晩秋の旅日記から	74
	俗化に失望する秘湯マニア	79
	旅行における個人の自由	88
	冬の宿——宿も宿なら客も客	92

旅と宿	96
Down・Up・Down・Up・Down	100
場末のホテルが教えてくれたもの	108
IV	
居候にて候	114
親孝行の弁	118
辻潤の作品——辻潤著作集第三巻の解説	121
父親辻潤について	125
ちどり足に続くハシゴかな	130
V	
印象とひとりごと	148
女の強さに屈した男達のもらす	
自嘲の格言集	162
VI	
告天子	166

夢二の詩	170
ノートから	173
日本人の肖像への断想	181
辻一の断章・一、二	192
小室新吉	
解題	200
あとがき	205

I



マンガンの海に泳ぐ鯨

昔一人の金掘りがいた。奥州の谷や山を三年も歩きまわったが、どんな幸運の一片も見付けることができなかった。すっかり疲れて、暮れていく谷を眺めていた。上の山温泉の灯が遠く幻の砂金の粒々だった。

ああ俺はなんて無駄な時間を、この長くもない人生の指のあいだから落してしまったことだろう。百度齒がみしても、この悔恨から見付けることのできるのは、己の愚だけなのだ……。すると足の下から声があった。それは一塊の石だった。

おまえの嘆きなんぞ、この俺にいわせれば、一瞬の吐息にもならない。あんまり笑わせんなよ。俺はナ、もう三千万年もこのマンガンの海を泳ぎつづけて、まだ解放されないのだ。海底火山の爆発に遭遇した次第は聴きたければ話してやってもいいが、大方はおまえと同じバカな欲望のせいなのだ。水圧、浪、地震は遠い過去。氷、雪、雨、谷川の流れ、それから風……。俺の愚かな牙はまだイシから抜けないのだ。

諸君！ 足を尊敬し給え



忍耐の忍という字はなんだか踏んばっている足首を正面から見ているような字だ。身体が一番下で全重量に耐えてがまん強く支えている足は、本当は頭や心臓よりも尊敬しなくてはいけない。動物という称号のとおり、私たちが祖先の祖先のまた祖先である植物から革命を起すことができたのは、この足のおかげだ。

足は自由について屁理屈をこねないが、自由を実践する。風に吹かれた種子は、どんな封建的な土地に落ちたとしても、どうしようもない。そこに芽をだした植物はその運命を甘受しなくてはならない。風の強い岩だらけの断崖だとしても松は抵抗せずに、ただ必死に適応しようとしている。そのために松の根性を支える幹がどんなにヒネクレるかは眼にも痛ましい限りだ。動物は足のおかげで、そんな屈辱をゆるさないですむ。

——オイドこへいくんだ。——足に聴いてくれ。
これはなんといっても賢者の返事だ。

——なぜ山へ登るか。——足があるからだ。

とても哲学的だ。ケープルカーがあるからだなどという安っぽいことはいわなくてくれ給え。自由がどっちの方向にあるかを思想より先に足は知っていて行動で示すのだ。

実は私は今日一日池溇の間を歩いた。夏の陽はカンカンに照りつけ、顔は塩をふいているというのに、靴はぐちゃぐちゃで、足は白くふやけてしまった。毎年毎年のことだが、今度こそ治ったとおもった水虫がまた蠢動しはじめて突如狂気のごとくダンスをしたい気持ちが起ってくる。さっきから妄想がちらついて、景色がすこしも眼に入らない。

……私はいま鉄道線路の枕木の上を歩いている。後方から轟々車輪の音がきこえ、だんだんに背中に近づいてくる。するどい汽笛の声、アッという間に私は列車に轢かれる。両足が切断される。しかし私はすこしも悲しまない。かえってホッとして切落された両足首を見てこういうだろうへざまアみやがれ水虫のヤロー……

靴をぬぎ靴下をぬいで冷たい水に足を入れると、若痛はみるみる溶けてなんともいえない幸福な気持だ。

——足よ先刻は申訳ないことを考えてしまった。スマン。

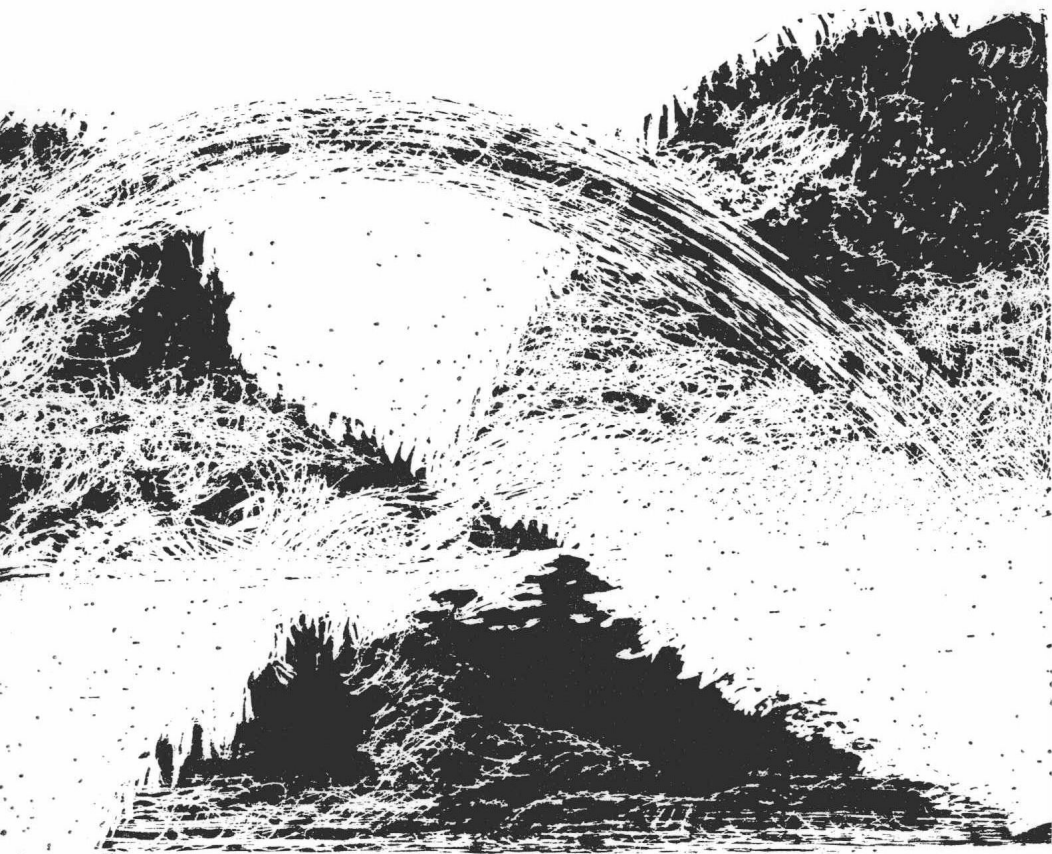




こういうこともあるさとおもいながら歩いた。初めてきた山なのに周囲は煙っていて十メートル先がやっと見える程度。きのうは谷、きょうは尾根だが、風景はほとんど変らない。雨々々。ザックの中のビニール袋に乾いた下着が充分あるのが、気持の支えになっているほどに濡れしょぼくれている。あんまり水を含んで、ヒサシも役に立たなくなった帽子の裏から襟足を伝わってしずくが背中に流込む。

薪がどんどん燃えて、熱いお茶でもだしてくれる様子だとウマイがと虫のいい想像をしながら、やっと到着したヒラタ小屋はやっぱり無人で、しめって暗かった。足下の見えるうちにと川へ降りて水をくんだ。水かさはそれほどではないが、このぶんじゃ明日は釣にもなるまい。

ストーブはなかったが、土間にじかに河原の石を積んで囲った炉があり、燃えさしのほかに薪も充分あった。窓の戸をあけ、種々点検した。カーバイトのランプが三個あって皆使えるのはありがたかった。とにかくどんどん火を燃した。針金に濡れものを全部つるした。アワレな旅人の皮である。



夜が明けた。雨はまだ降っている。どうやら乾いたが、皺だらけの燻製と相成った旅人の皮をまた身につけて、小屋の帳面に記名した。帳面の表紙に管理責任者蛭田棟吉とあるところをみると、案内書のヒラタ小屋は誤りかな。いずれにしてもありがたい管理者であり小屋であった。感謝を書込んで、また雨の中へでた。

釣橋を渡って対岸の林の中のジグザグを登る。一時間ほど登ったら空が明るくなって雨がやんだ。急に小鳥が囀りはじめた。青空のカケラを見つけたときにはドキンとした。急にうれしくなってきた。尾根にでてそこから小さい頂に登った。谷のガスはドライアイスの煙のように流れて光の中に消えていく。虹がかかった。小屋の谷間に素晴らしい橋がかかった。飛上がりたような気持なのにただじっとしていた。実際胸の中は飛上がって踊っていたのだが、残念なことに胸には手足がない。身体中でオドロイたりワクワクできるのは胸だけなんだと気付いた。

人間泰然自若としてビクナリしてることだってあるんだ。「感情とは肉体に現れた精神である」という心理学の定義には例外がある。



フロイトの夢の分析によると手のサインは罪の象徴だということになっている。罪だかなんだか解らないが、こんな便利な道具が首の下に二本もくっついておいてお蔭で、人間はずいぶん他の生物にできないことを発明してきた。手がなかったらバッハもベートーベンもあつたもんじゃない。ゲンコツでパンチを食せるのは罪かも知れないが、なぜたりさす

ったり……アッこれも罪かな？……とにかくだね、これは便利は便利だ。
ある日つくづく手を眺めながら、私はそばにいた先輩にいったもんだ。

——よく見ると手なんて変なものだ。

——どうして？

——身体の末端がこう五つにヤブケテルというのは、なんだかグロテスクじゃないか。

——誰にとつても当然なことを異様にとる考えはエクセントリックな傾向でよくない。キミの思考形質はアブだぞ。

誰にとつても当然なことを異様にとつたからアイザック・ニュートンは存在したんだ、といつてやりたかったが、遠慮してやめといた。こういう遠慮ができるところがノルマルなと

